

シベリア抑留記

熊本県 大坂 公夫

入ソ前の軍隊生活について

私は太平洋戦争開戦の年の昭和十六年三月一日に、満州独立守備歩兵第三大隊第四中隊（二三部隊、南満の安東）に入隊した。内地と違い面会人もなく、私たちの同年兵は南九州、二年兵は広島、三年兵は福岡、その上は関東、一つ下は東北・北海道と全国より集められ、私的な制裁も多かったようだ。

入隊した年の十二月には、早くも北支方面、長城線一帯の匪賊討伐に参加したが、相手は八路軍（バロセン）と言っていた。考えてみれば、今の中国軍の前身の軍隊であり、中国の住民は皆八路軍の味方であり、我が軍は敵であったことを戦後知った。部隊長は兵から進級された南波少佐であり、夜中の一時、二時に急に出勤することは当たり前で、憲兵隊より配属になった下士官の話では、

南波部隊に行ったら殺されると評判していたとも聞いた。

何カ月行動しても敵と正面より遭遇することはなかった。戦後わかったことは、日本軍との戦いに敗れた中国軍は、日本軍に対しては絶対勝利をおさめる状況、地形以外は手を出すなどの教えがあったようだ。

我々は、谷底の平坦な道路を行動することができず、山々の峰から谷へ、また谷から峰への連日の行動で、夏など川につけたように汗で軍衣は濡れて、それを絞りながらの露営が何日も続くと自然にシラミがわいた。丸一日歩いても住家が一軒か二軒ぐらいの場所も多く、討伐の行動は地獄の苦しみでもあった。一度腰をおろしたら立ち上がれないぐらい疲労していても、順番の警戒の立哨はせねばならなかった。当時の苦労は終生忘れられない。

満一年を過ぎた昭和十七年三月一日付で選ばれて上等兵となり、五月には戦死した天草出身の同年兵佐伯君と、三年兵三人、計四人の遺骨を持って内地に帰る機会を得て、我が家で三泊ぐらい暮らしたが、その年

の十二月、母が五十四歳の若さでこの世を去り、そのときの帰郷が母との最後の別れになった。

戦況が厳しさを増した昭和十八年末には私たち三年兵だけ残し、隊長以下、同年の下士官、兵、全員南方戦線に移動し、あとは私たち同年兵だけで、数カ月間留守の勤務をした。南方に派遣された私の部隊は、小島のポナペ島の守備についたそうだが、敵の上陸もなく、戦後、全員無事に帰国できたとのこと。幸いなことだった。

私たち安東の部隊には、召集を受けた名古屋方面の軍人（ほとんど妻帯者）が入り、軍隊の生活、空気は一変して全くなごやかな日常だった。当時の軍隊生活では、兵はいろいろな情報は知らせてもらえず、新聞、ラジオ、雑誌とてなく、内地の状況や戦況は、終戦まで知り得なかった。

それまで満三年で除隊していたのに、四年兵となり、五年兵となっても除隊できず、満四カ年を軍隊で過ごすことになった。

安東の営庭には、木製の高射砲が数門、砲身だけ出

して偽装したものが置かれ、外部に対して、ここには高射砲隊がいるぞとの見せかけの装置があった。日本一の精鋭と言われた関東軍の現役兵は、南方戦線に移動し、ともに兵器もほとんどなくなり、満州が空になっていく状況は感じていた。その後、我が部隊は富錦の陣地構築のため移動して、毎日馬車を引いてセメント、砂、砂利を運搬する仕事が半年以上続いた。他の兵がだれも手をつけたがらない荒馬を入隊前の経験を生かして乗り回し、弱らして使ったことも軍隊生活のよき思い出である。

昭和二十年八月には、私は西東安の幹部教育隊にいた。当初隊列を組んで出発したが、将校は馬に乗って、ソ連軍の追撃を恐れてか逃げるような状況であり、軍装の兵の中にはついていけず落伍する者も多数いたが置き去りにして進んだ。頼みの友軍の飛行機は一機も見えず、空を飛来し銃撃するのはソ連機だけであった。数日後、前面より敵戦車の砲撃を受け、ともに行動することは困難となり、私たちは八人の戦友と行動を共にした。

二、三人の少人数で行動した者は寝ているところを住民に襲われ、銃を取られたり裸にされた者もいたが、こうして銃を持った住民が次第に勢力を増して匪賊化していった。

方向を見失った我々は、道路や線路は町に通じているので、小高い山に登り付近の状況を見ることにした。真下の国道を、ソ連の機械化部隊が続々と進行していく。過去四年半の軍隊生活で見たこともない重火器の装備である。兵はマンドリンという連発式の自動小銃を肩にかけて歩いている者、車に腰掛けている者、さまざま。続々と続く重戦車、重火器群の威容は言葉では表せない。一方我々の装備は、明治三十八年の日露戦争当時の三八式歩兵銃である。菊のご紋章が入り朝夕大切に手入れした兵器であるが、単発式で全く心細い。真下の敵までの距離は百メートルもない。撃てば一人で二、三人ぐらい倒せるとは思ったが、その後で我々は全滅することは明らかで全く手は出せない。当時の我が軍の装備では、大人と子どもの戦争にもならないと感じた。

夜となり、ソ連軍の機械化部隊の集結地では、明かりがこうこうと輝き、一つの大きな市街地の様相であり、全く敵なしの情景である。我が軍にはこれらを攻撃する飛行機も戦車も砲もないことが十分察せられた。沿線の町という町はすべて大火災となり、ソ連軍に利用されないために、友軍によって火をつけられたとも察するが、戦争でなくては絶対目にできない光景であった。

我々は行軍の途中で、戦争ゆえの地獄を種々目にした。ある開拓団では、全員自決して、主を失った馬だけが散らばっていた。避難の途中でお産となり動けなくなっても、自分の身を案じ、だれ一人助ける人もなく死んでいる人もおり、八月の暑い盛りで死んだ人の腹はパンパンにふくれ、日がたった人にはウジがわいている。人の死体と馬の死体では臭いの違うこともわかった。その臭いによって、今度は馬が死んでいるぞ、今度は人だと話しながら歩いた。

ある婦人が子供を一人背負い、三歳ぐらいの男の子の手を引いて歩いている。よく見ると子どもは裸足で、

足先からは血が流れている。「どうしたのですか？」と聞いたら、「この子は生まれてまだ一キロも歩いたことはありませんでした。しかし、目の前で自分の友達が殺されるのを見ています。貴男もあんなになるよ、と三つと、毎日毎日しがみついてついて来ます」とのこと。我々もどうすることもできなかったが、この子供も故国へは帰れなかつただろうと想像する。

我々は途中で、ある部隊が駐屯していた七星の陣地内に立ち寄ってみて驚いた。一分一秒を争って逃げた状況だ。被服は散乱し、食料の味噌、米、しょうゆなどが山のように積んである。一晩ゆっくりと入浴もし、休養して、皆新品の被服に着がえして、携帯食糧として大豆を各人三キロくらい炒って道路に出てみると、続々と続く避難民に出会った。食物とて何もなく、子供はトウモロコシの殻をしゃぶっている。かわいそうになり、大豆を一つかみ与えたら、母親たちから次々と「兵隊さん、私にも少し下さい」と限りなく哀願され、携帯用の大豆も短時間でなくなつた。

ここに記したことは一部だが、八月九日より九月十

日までの一カ月の野宿だけの行動は、書けば一冊の本になるだろうと思う。

避難民の人々に幸いしたことは、時期が夏の終わりから初秋にかけてであり、トウモロコシが食料になり、畑には胡瓜や馬鈴薯があり、夜は寒くなかつたことだと思う。他の季節であれば、食料不足や寒さのため死亡者は倍増しただろう。

昭和二十年十月、海兵第四百七十大隊として千人で編成、徒歩や貨車でイズベスコワヤ（四地区）第一〇八分所に着いたのは十一月四日だった。

当時の姿は、各人、満州の収容所などで拾つた缶詰の空き缶を腰のバンドにぶら下げ、これらの空き缶はそれから代用食器として、ブリキ職人によりブリキの食器ができるまで一年半以上使用した。むしろを背中に一枚背負い、顔は黒く焼けて痩せ、これが関東軍の末路かと思うと誠に哀れでもあった。

荒れ果てた収容所はこれといった設備もなく、翌日から近くの山から白樺の木を切りその丸太を並べて、上下四人休めるトンボ形の寝台を各人につくり、その

上に携行していたむしろを一枚敷き、交替で夜通しドラム缶のペーチカを焚き、靴をはいたまま寝る生活であった。

以来満四年間、夏衣が支給されれば夏中、冬衣が支給されれば冬中、その一着で作業に出るときも寝るときも過ごした。確か毛布が一枚支給されたのは一年以上過ぎてからだったと思う。持ち物とて何一つなく、以来満四か年間に、寝台だけが食事の場所であり、休息の場所であり、すべての生活の場であったことなど、今日の日本人にはいくら話してもわかってもらえないのは誠に残念でもある。

支給される食事はあまりにも少量で同配分であり、私のように体の小さい者はどうか辛抱できたが、中には入隊前力士だった人もおり、体の大きい人ほど短期間のうちに目立つほど痩せて、これには同情した。例えば八月九日、ソ連の参戦以来三カ月以上も入浴しておらず、シラミの発生による発疹チフスの流行、小さな石にでもすぐつまずいて倒れるような栄養失調などにより、死亡者が続出した。多いときは、毎日八人

か十人ぐらい亡くなられたと思う。死体は屍室に積まれたが、死亡後は裸にされ、零下何十度の寒さの中カチカチに凍り、まるでするめの干物のごとく痩せて、汚れて、戦友であっても何一つかまうこともできず、線香の一本をあげる人もなく、平和になれた今日の人たちには想像できない、言葉ではあらわせない哀れさであった。死亡者が八十数人ぐらいに達したときだっただろうが、一度だけ（仲間の中にいたお坊さんだったと思うが、仲間の中にお経を唱えてもらい供養したことを思い出す。

隣の寝台で枯れ葉でも落ちるように、何の苦しみもなく、父母、妻子のことを思う気力も失せ、眠りにつくようにして死んで行く。隣に寝ている自分も、人が死亡していくのに何の感情もわかない。だれが死んだか名前も全く覚えていない。故郷に帰れる望みもなく、自分自身がまたすぐ後を追わなければならない状態。眺めるものは夜の星だけ。そのようなときは、人間の生命の価値は無に等しいと感じた。満州で命を落としたり戦友をうらやましく思ったこともこのころであった。

腹が減って夜は眠れない。何とかしてもらいたいと炊事に頼み込んだ結果、スープの水の量だけふやしてもらったのはよかったが、一千人もいる収容所に孤立した便所が四カ所しかない。夜通し小便行きの列ができた。零下何十度の夜暗いとき、外で用便を終え寝台に帰り着くと体は冷えきっており、十分な睡眠もとれず、これではしょうがないと、またもとのスープになった。

飯はなるべく量を増すため軟らかく炊き、四角い大きな箱の中に移し、固めるために時間をかけて冷まし、それを定規でマッチ箱の倍ぐらいの大きさに切り、食券と引き換えに渡すようになっていたが、これがソ連の考えた角飯である。支給される量は目方によって一定に定めてあり、コーリヤン、エンバクなどは上手に炊けば五倍になり、大豆、エンドウ、小豆など豆類は二倍にしかならない。したがって豆類のときは見た目には少なかった。食事のことで思いつくのは、大豆だけ毎食二カ月続けて食べさせられたときは、足に何か重いものでもぶら下げている感じで歩くのにも大変苦

勞したが、ジャガイモだけ二カ月続けて食べさせられたときは何ともなかった。

一週間に一度は桶一杯の配給の湯で入浴できたが、出るときは陰部の毛などを全員剃らされた。日用品の支給とて全くなく、タオル代用にはボロ布を使用したが大変であった。入浴は一週間のうち四回、二時間で約二百五十人が終わらなくてはならない。そのとき、シラミ駆除のため被服の乾燥があるが、一度乾燥室が火災となり、私もそれまで使用していた軍服を焼失し、栄養失調で死亡した人が着ていた、小便でガバガバになった被服を渡されたが、不平不満は通用せず、あときの気分だけは今も忘れることができない。

一〇八分所では、そのうち元気な者だけ二個小隊約八十人だけ作業に出ることになり、私もその中に加わることができたが、仕事は、出水で道路が凍って盛り上がり自動車が行きできない場所の氷割り（この作業は一日でも欠かすことができず、今でも囚人かだれかの手によって続けられているものと察する）や、死体を埋めるための穴掘りなどであったが、凍った土はつ

るはしぐらいではいくらも掘れず、そのため死体は野犬などに荒らされたことと思う。当時死者の墓標に氏名を記入されていた宮崎県出身の松野重太郎曹長とは、帰国後一度再会でき、幸いであった。

一〇八分所での生活を約八カ月続け、昭和二十一年の七月には山の中の四一七分所に移った。このころは死亡者も病院以外ではなくなり、抑留の苦しい生活にもなれてきた。自分たちで山から木を運び、丸太を積み上げて家を建て、収容所全部の建設を我々だけの手で完成した。したがって、新しい家で夜の南京虫の被害もなく、この収容所が一番長く、思い出も多い。

昭和二十一年末ごろまでは、旧軍隊の組織そのままに、大隊長（大尉）の下に中隊長四人（皆、中尉）、中隊の下に四つの小隊（小隊長は上級の下士官）がそのまま作業隊の組織として残っていた。そして各中隊から一人、計四人の命令受領者（皆、下士官）が、翌日の作業予定を聞いて、夜疲れて皆が寝静まった後で各自、中隊の四人の小隊長を起こして伝達した。私もこの中の一人として役目を承ったが、昼間は皆と一緒に

に働き、夜は毎夜遅く眠っている小隊長を起こして伝達せねばならない。このようなことが半年ほど続き、自分は体力的にいつ倒れるだろうか？と思うこともしばしばであった。そのようなときソ側の収容所長より、ソ連警戒兵の手が足りないのので、日本側より信用できる優秀な人物を五人だけ出すよう話があり、大隊長は私たちの人並み以上の苦勞を認めてのことと思うが、作業伝達者四人とほか一人を指名してくれた。

私たちは五人はOKと書いた腕章をはめて、ソ側からと日本側から認められたのである。ソ連警戒兵は四隅にある望楼に立って二十四時間警戒している。日本の軍隊では一時間交替であったが、驚いたことに夜の想像を越える寒さの中、四時間交替である。その体力の違いをつくづく思わされた。夜は電気もなく、暗くて遠くまで見通しがきかない。したがって、我々の最初の仕事はゴム長靴の加工くずなどを集め夜通し燃やすのが仕事であった。

そのとき、炊事場の近くで夜中に火をどんどん燃やしているのを目にした。近寄ってよく見ると何やら投

げ込んでいる。驚いたことに、牛の足先の爪のついて
いる部分であり、しかも大量である。当然捨てるべき
ものである。聞けば、今日食事用としてこれがトラッ
クで運び込まれたが、皆が見たら気持ちが悪くなるだ
ろうから、人々が寝静まった夜中にこうして火の中で
燃やし、爪と毛をはがして明朝のスープのだしにする
のだとのことだった。これでみんながうらやましがっ
ている炊事勤務者のご苦勞も知り得た。

私の仕事は、先にも書いたがOKと書いた腕章をは
め、各作業隊が三十人、四十人と数多く別々の作業場
に向かうためソ連カンボイの不足を補うのが役目で、
作業場の往復や現場の監視だった。ソ連のカンボイ
と一緒だったが、たまには単独のときもあった。逃亡
を防ぐのが任務だが、逃亡すればそれは死につながる
ことぐらい皆承知していたので、そのような者が出る
はずもなく、実際は多目的な役割だった。腕章のおか
げで柵外に出るのも自由で、作業伝達で人並み以上に
苦勞した後は、こうしてわりと楽な毎日で、毎月の体
力検査で一級になっても、重労働に回される心配もな

く気分的にも幸いだった。

こうして数カ月を過ぎたころ、補助警戒兵の役割は
ソ連側より認められて、五人より十人に増員された。
その長の選出に際して、その責任の重大さを感じて引
き受ける者がいない。やむなく私が長に任命された。
私の任務は、主に朝夕の人員の点呼と、朝夕の作業隊
の出発、帰所するとき人員の点呼を行うことであつた。
外の警戒に当たるのは赤軍系の軍人であり、収容所内
の警戒には内務省管下の軍人で、将校二人（ともに少
尉）、下士官二人（伍長、軍曹）の四人がその任に当
っていたが、実に意外に感じたのは、将校が掛け算
割り算ができなかったことだ。五列に並べてすべて足
し算である。この国の教育は一体どうなっているのだ
ろうか。入ソ当時人数を数えるとき、アジーンナツツ
（十一）、ドヴェーナツツ（十二）、ツリーナツツ（十
三）と数えていくのを、皆腹が減って食べることのみ
頭にあつたので、何だかピーナツとかドーナツとか言っ
ているようだと話していたものだった。朝夕の点呼は
皆の苦勞の一つであり、いらいらして列が乱れる。一

千人の足し算で大変な時間を要し、皆寒さと空腹で弱り困っていた。

そのうちに掛け算のできる私に点呼の役目を持ってきた。これは大変なことになったと思った。何も言葉のわからない私ではあったが、断ることもできない。まず千人までの数え方を覚えなくてはならない。それに出席していない炊事が何人、食糧受領者が何人で、現在員が何人との言葉覚えなくてはならない。今振り返って思うに、単語だけのつづり合わせで二年近くも役目がよくも果たせたと思う。私が点呼に立ち会うようになってから短時間で終わるようになり、大変皆に喜ばれた。いつも衛兵所において、各作業隊の出入り際の人数の点検、点呼の結果を将校に報告するのが私の役目となった。警戒兵の長として、日曜日も休日の日もいつも衛兵所にいなくてはならなかった。朝夕点呼をとるのに一枚の紙の支給もなく、渡された鉛筆一本を宝物でももらったような気持ちでそれこそ大切に使用した。最後には、短くなったものを箸で挟んで糸でくくり、縦と横の長さが同じになり、芯がなくな

るまで使用した。また紙の代用には羽子板のような板を使用した。すぐに鉛筆でいっばいになり、それを削るのですぐに薄くなった。

私は点呼のとき壇上に立ち、ソ連側よりの注意事項を伝えることもたびたびあった。この機会に各県人会の組織もつくった。「今夜どこの部屋で〇〇県人会をいたしますので、〇〇県出身の方はご集合ください」といつも伝えた。このことは全員に大喜ばれて、私に対する信頼も増したし自信にもなった。私はその趣意書に次のようなことを書いたと覚えている。「我々は、遠く祖国を離れ、親兄弟とも別れ、帰国できないかわからない。せめて同県出身者だけでも一堂に会し、故郷を語り親睦を深め、お互いに慰め元気の足しにしよう」と。しかし横やりが入り、長くは続かなかった。たとえ親兄弟であろうとも資本家はすべて我々階級の敵だ、お前の考えは反動に近いと厳しく言われ、中止した。私は、満ソ殉難記の最後に記載してある、野村正美中佐が収容所内で相互激励親睦会を作ったのが原因で長期の受刑者となられたことを読み、当時を思い

起こすとき愕然とする。

昭和二十一年の十一月ごろ、故郷にハガキを出すことが許可された。文字はカタカナで、元気でいること以外は何も書けなかったが、この便りの返事が収容所で一番早く私に届いた。父からのものであった。疑った戦友もいたが、間違いなく父の字である。大隊長より全員の前でこの便りを読むことを依頼され、私は壇上より朗読した。文通ができたことは帰国できる前提ではないか？皆がそのような気持ちになり、収容所の空気は一変して明るくなった。この便りにより、南方、中国からの引き揚げが完了し、我々だけが残されていることを知った。

帰国後、母の亡き後まだ成人前の妹が、第二人の面倒からすべての家庭の世話一切を受け持ち、八カ年半の留守中、私の健康を祈り毎朝陰膳を供えていたということを知った。終戦後も一切の便りもなかったため、不安な毎日を通し、一日千秋の思いで私の帰りを待っていたらしい。田舎では郵便配達員も住民と仲よしである。私の家庭の事情を知っている配達員は、私の便

りのハガキを手を挙げて高く持ち「来ました、来ました」と叫んで届けたと聞いた。

衛兵所は収容所の入り口の近くにあり、ここがただ一つのソ連側職員十数人の集会所であり、また会議室でもあった。たびたびの会議のときでも、一緒にいる私に対して何とも言わなかったが、私は言葉は全くわからなかったのだ。

一千人もいる収容所に電話がここに一つしかなかった。その電話たるや、いつも耳に当てる聞いていないてはならないので、収容所の職員の婦人や娘さんたちが八時間交替で聞いていた。電話の受話器を勤務時間中耳に当て、外部からの電話を聞くだけが彼女たちの仕事である。ある日、彼女が私に、「大坂、日本にもこんな便利な物があるか？」と聞くので、「まだまだ立派なものがある」と答えた。またあるとき、満州から運んだチリ紙を見せ「日本の用紙は質が悪い」と言うので、それは日本では日用品だと説明したが通じなかった。

衛兵所内には、読み物として、日本語に訳した社会

主義社会国家の構成、躍進する状況、共産党史、マルクス論、唯物論など十数冊あったが他に読むものはなかった。私はこれを毎日読んだ。ときには職員同士で意見の相違から激論となり、顔を真っ赤にして拳を振り上げ今にもつかみかかるほど激怒しても、相手に手を下すことはなかった。日本だったらけんかになっていたと思うが、先に手を下せばよほど重い刑罰があると察した。私は四年間の抑留中、ソ連の警戒兵や監督が我々抑留者に手を下したことは見たことがなかった。

私は、收容所外にある職員の官舎、特に所長の自宅には何回も出入りする機会があった。丸太を積み上げた、間取りも日本のようにいくつもない簡単なつくりである。便所も風呂場もない。便所など室内でも冬季はカチカチに凍るだろうし、汲み取りの人夫もない。したがって、よく見ると野外で用を足しているようである。あの寒いところで、奥さんも娘さんも野外で用を済ましていると感じた。

また水は大変な貴重品である。收容所より二キロも

離れている川の厚い氷を割り、樽に入れてソリで馬に引かせて運ぶのであるが、收容所に着くときは三分の一ぐらい凍っている状態で、千人の者の炊事に使うだけであり、我々は手を洗うことも顔を洗うこともできなかった。ソ連の職員は朝コップ半分の水で顔を洗っている。コップの水を口に含み、手のひらに出し、それを二、三回繰り返すことで洗顔はできるのだ。一般家庭で使用する水は、一日バケツ一杯で済ますのとことだった。したがって、食後の食器も水で洗うことはなく拭いて済ますのだ。食事も熱いものは食べず、ある程度さましてから食べる。来客との会食も残るような調理は絶対しない。焼き魚は食べず、昼食の副食用は生のニンジンなどであった。

一生懸命よく働いた者から順次日本に帰すとの宣伝があり、最初、十人ぐらいハラシヨラポーターが帰るときは收容者全員で盛大な見送りをした。ソ連側より、この人たちはよく働いたのでこうして早く帰れるとのあいさつがあり、大部分の者はそれを信じて、その後認められるために頑張った。しかし実際には転属の名

目で、病弱者を初め仕事のできない者から順次先に帰したようである。常識で考えても、健康でよく働く者ほど後に残すのは当然である。またソ連に不足していた技術者も後に残されたようだった。

私のいた四一七分所の沿線には、六キロごとぐらいに各収容所があったと思うが、我々の日本人抑留者の収容所の隣はソ連の女囚の収容所であり、またその隣はソ連国内の男性囚人の収容所であった。男の囚人は頭をツルツルに剃っているのですが囚人とわかった。女性の収容所では刑期が終わる半年か一年前から、柵内の作業ではなく自由に柵外での作業が許されていたようだ。

これは警戒兵とともに行動していたころの思い出だが、警戒兵と女性囚人との話し合いはすぐに成立し、木陰で性交を始めた。警戒兵が恐れるのは直属の上官だけであって、中隊長などの巡視を監視するのも我々の役目だった。男女の性交を真下に見ても、鶏の交尾を見るくらいのも感情もわかなかった。こうして女性が妊娠して子供を産んだ場合、その責任は問わず、国が

責任を持って養育すると後で聞いた。

二十歳代の若者の大勢の集まりに、四カ年の抑留中すべて食べ物の話だけで、色情的話は一度も聞かなかった。

昭和二十三年の夏ごろだったと思う、衛兵所での電話の係の娘さんたちも日曜や休日には休みで、そのようなときは所長は私に依頼し、所長官舎への出入りも自由で、電話での用件を伝えると所長も大変喜んで、便利とありがたさを感じていたようだ。しかし、「好事魔多し」のたとえのとおり、よいことばかりは続かない。日本人が電話の応対に出ることは、ソ連の内規に反することだった。私に依頼した所長は責任を逃れるし、このことが一つの犯罪につながったのだ。後で内容をよく知っている政治の担当者が「ナチャーニツク（所長）のベルウンソーが悪かったもんね」と同情の言葉をかけてくれたのがせめてもの慰めだった。私は簡単な裁判を受け、前職者と呼ばれていた警察官や憲兵（アクチーブの言葉をかりれば資本主義の番犬）、そのような前歴の人だけを集めた特別の収容所に移動

させられた。ハバロフスク二一分所ではなかったかと思ふ。

ここでの生活は、我が身の保全のため、またソ側に認められて一日も早く帰国せんがため日本人同士で相手を傷つけ合わなければならぬような、精神的にも肉体的にも、大部分の人は地獄の苦しみを味わった。

作業単位は大体四十人ぐらいで、二十五歳以下の者は残らず青年行動隊の組織に入り、目につく活動をやらなくてはアクチープの指摘を受け、我が身が危なくなる仕組みであった。毎朝作業出発前、全員が集合整列したとき、必ず行動隊のだれかが壇上に駆け上がりアジを飛ばす。「民主主義の城塞、労働者の祖国ソ同盟のために身を粉にして働くことこそ日本の復興につながる。我々はお互いに生産競争を強化し（平塚運動）、働きの悪い者は反動としてつるし上げよう」。このようなことが毎日繰り返された。

作業出発の時間が迫り、ソ連のナチャーニツクでさえ「フワーチ（十分）」と言ってとめる状況であった。作業隊四十人もいれば体力により優劣の差が生じる。

一生懸命やろうと思ってもできないのだ。そのことは皆気づいていたと思う。みんながつるし上げの怖さを感じ力の限り働いたが、どの作業隊も同じように作業サボの名目のもとに、一組に一人か二人必ず青年行動隊の犠牲にさせられた。

一日千秋の思いで、一日も早く故郷に帰りたいと思う心は、皆同じであった。そのようなとき「作業サボ」と印を押された人たちは、毎朝千人も整列している前で壇上に立たされ、「この者は反動だ」「反動は絶対日本に帰すな、シベリアの白樺の肥やしになってしまえ」と叫ばれる。反動と名づけられた人に対しては、自分の身を考え、だれ一人話しかけもせず孤立させられる。そして二十四時間監視の中に置かれるのだ。夜の星空だけしか見ることのできない異郷での孤立は、味わった者でなければ絶対わからない想像以上の苦しみだったであろう。我が身が明日は反動になりはしないか？との不安の毎日で、それこそ力の限り一生懸命働かねばならない。合わせる顔にだれ一人として笑顔なく、同胞相食み、目の色も変わり、息の詰まるような、毎

日が地獄の生活だった。

仕事の遂行量を決定するために、すべての仕事に対して一人で遂行できる基準が定められており、「固定ノルマ表」という分厚い本をめくりながらデジャートニック（ノルマの算定係）によって仕事の終了後決定される。いかに頑張っても十分な食糧、栄養も与えられない我々日本人に、ソ連人並みの法定ノルマ表で計算されても、遂行できるはずはなかった。

私は月一回ぐらいのタバコの配給のとき、受け取らず皆で配分してもらっていた。中にはパンとかえる者もいたが、そのようなことで信用を得たと思う。数カ月後、四十人の組長に選出された。一日の仕事が終了すると、ノルマ係から、お前の作業隊は今日の達成量は三〇〇%だ、二八〇%だという具合に、全体の仕事の達成量の通知を受ける。組長の仕事はそれからが大変だ。組全員、各人の達成量を報告せねばならない。

Aは七〇%、Bは七五%という具合だが、最終的に四十人の合計が全部の%に合わなくてはならない。毎日夜遅くまでかかって、翌朝提出する。組長も組員の仕

事だけ見ているわけにいかない、作業員として率先して働かねばならない。正確な報告ができるはずはなかった。幸い無報酬であったので何事もなかったが、これが有給であれば公平を欠いて大変なことになったと思っ

た。過去には、ノルマによってみんなが本当に欲しい食事の量を、甲食、乙食、丙食と区分して働かされた年があつたが、今日は組全員が精一杯働いて甲食をもらおうと頑張った結果が期待に反して乙食であつたり、隣の組は楽な仕事でもよい%をもらえて連日甲食であつたり、不満続出で、このような制度は長くは続かなかつた。狭い通路からの煉瓦の背負い出しはきわめて重労働で、いかに頑張ってみてもせいぜい六、七〇%達成が限度であつた。そこでやっと思え出したのが一輪車であつた。これで一五〇%は達成できると喜んだのもそのときだけ。一輪車では%が背負い出しの何倍かになっていることに気づかなかつたのである。

抑留中の満四カ年、一度でもよい、腹いっぱい食べてみたいと思ひ続けた。帰国して茶碗で何杯も食べら

れたときのうれしさは今も忘れられない。あまりのひもじさに道端の食べられそうな草をつまんで食べる者もいた。警戒兵が「日本人は不思議な人種だ、草を食べる」と話していたが、牛馬ではあるまいし、どこの世界にも草を食べる人間がいるはずもない。日本料理には欠かせない味噌やしょうゆの全くない、塩だけで味つけされた毎日の粗末な食事が、三度三度とも喉へ引き込むようにおいしく感ずる生活であった。今日、宴席でも鉢盛など半分以上も残すような豊かな世の中となり、あの当時のおいしさを味わうことは終生できないだろう。ひもじさにまじり物なしだ。

作業出発に際して、昼食携行ということで朝食後支給されるわずかの昼食をじっと持って我慢できる者はいない。朝食べてしまい、昼食なしの夕方までの作業の辛さは言葉ではあらわせない。とにかく今日の生活では絶対口にしない魚の骨、頭、肉の骨など食べられるものは長時間かけて炊きみんな食べた。今は故人となられた、友人の蒲地新一氏が「大坂さん、抑留当時を思うと、今ならごみ箱をあさってでも十分生きて行

けますな」と言われたことがある。当時の困苦を味わう人はこれから先はいまい。夏の暑い日の一日中の作業に水筒持参もできなかった。

夜は電灯もなく、白樺の皮を燃やしてあかり代用にしたが、部屋の中は常に暗く、白樺の煤で皆の顔は黒ずんでいた。防寒のため天井にも土がのせてあり、宿舍の北側の窓は、冬中氷が溶けず陽が差すことはなかった。

自主的な健康診断は全くなく、月一回体力検査が行われた。方法は、裸にしてしゃがませ、尻の肉をつまんで引っ張り、その伸び具合によって体力を測定するのである。大体健康は人が病気などにより段々肉が落ちていく場合、臀部の肉の落ちるのが最後と聞いたが、当時はだれの皮膚も老婆の肌に似ていた。割合伸びなかった人が一級、二級となり、一カ月間ノルマによる重労働、三級の人は室内の作業、一番下が病弱者と見て一カ月間の休養となる。神経痛その他でいかに苦しくとも、発熱か外傷など、外目ではっきりしない限り休めなかった。日用品と名のつく物の支給も一切なかつ

た。便所も野外で囲いもなく、今日では想像できない粗末さであった。思うに、日本の戦後同様、ソ連国内全部が食糧や生活物資すべてが大変不足していたことをすべての面から容易に想像できた。

収容所での生活は、皆本当に裸の姿で、そこには学歴も地位も資産も金もない。全く同じ立場の共同生活の四カ年を通じて得たものは、人間に上下の差はなく皆同じであること。人との交際では、どんな相手でもこちらよりよくすれば、相手もよくするということ。このことは、私の人生観として大変役立ったと思っ

ている。
念願の我が家に帰り着いたのは、昭和二十四年九月の上旬であった。昭和十六年二月中旬、家を出てから実に八年七カ月ぶりであった。私の戦友、宮崎県出身の坂本君は入隊前に結婚し、生まれる赤ちゃんを見ずに入隊し、軍隊からシベリア抑留と一度も帰郷できず、帰ったとき子供はすでに小学校二年生になっていた。戦争の何と非情なことか。

久しぶりに見た我が家は荒れ果て、田畑、山林も荒

れており、食糧増産の折でもあり、心より我が家の再興を誓った。時すでに三十歳であった。

振り返れば、我が一番若い二十歳代の青春は、軍隊よりシベリア抑留と、自由のない柵内の生活であった。しかし、我が人生にあの当時以上の苦しさは全くなく、当時は思えばどんなことでも平気であり、若いときよりき修業であったとも思う。

私は現在、我が国ほど立派で住みよい国はほかにないと思っている。豊富な水や温泉があり、必要な諸物資や食べ物も得られ、気候も最高によく、真冬でも素足に地下足袋で出られる。外側の戸を一度開けて閉め、内側の戸を開けて入らねばならないシベリアの気候と何と大きな違いであろう。そして、仕事と休息の自由がある。ノルマの遂行に毎日毎日苦労したこと、年一回の正月元旦の一日を休むために、前の週の日曜日を休まず働いた思い出や、一番ありがたいのは言論の自由である。何をしゃべってもだれからも束縛されない。何の心配もなく自由な討論ができる。このありがたさは実際経験した者でなければ、平和な社会に過ごす今

日の人にはわからないだろう。すべてが解放されて、希望に満ち、足も軽く、近所の人や親類の好感の中で、毎日飛び跳ねたいようなうれしい、安心した帰国当時の毎日。また一方では、夢の中であの恐ろしいシベリアに再び連れ帰されそうになり、目が覚めてみて心より安心した思い出など、五十年後の平和な今日でも昨日のこのようにはっきりと思ひ出される。

彼の地で望郷の念の中で亡くなった多くの戦友を思い、我が熊本県では関係者の大変なご努力と各方面のご支援により、他県に負けない立派な慰霊碑の建立も終わった。

八十歳近い今日、戦争が絶対起こらないことを心より祈念しつつ、現在の平和な生活に対して感謝の毎日である。

【執筆者の紹介】

大正九年三月十日 現在地（山鹿市）に生まれる

鹿本農業学校を卒業後、家業の農林業に従事する

昭和十六年三月一日 現役兵として満州東安に入隊し、

終戦まで四年余り軍隊生活を送る

昭和二十年八月九日 ソ軍の侵入を受け、戦闘に備え
後退中、終戦となる

昭和二十年十月 海林第一四七作業大隊としてイズベ
ストコーワヤー〇八分所に送られる

昭和二十一年七月 イズベストコーワヤーよりウルガル
四一七分所へ移動

イズベストコーワヤーウルガルは、第一シベリア鉄道と第二シベリア鉄道を連結させるため山中に鉄道を建設したものである。その労働に当てられたのは牡丹江方面軍であり、海林に集められ、一千人単位で海林第一〇作業大隊として数キロメートルごとに配置され、総数は約二万人と思われる。当時は中国との戦争に備えてのことであったと思う。

昭和二十四年九月一日 舞鶴に帰還、家業の農林業に従事し今日に至る

昭和二十五年 結婚。以後、山鹿市農業委員、山鹿市

民生委員

昭和五十年一月 山鹿市議会議員初当選。以後三期連

統十二年、市議會議員

昭和五十二年十一月 全抑協熊本県連合会結成

昭和五十三年四月 全抑協熊本郡市連合会（会員数四

百五十人）を結成。その会長として就任。各校区ご

とに支部を置き、会の運営に多大の貢献をされた。

また熊本県連の副会長として県連のため活動し、め

ざましいものがあつた。

平成元年 全抑協中央会長表彰

平成八年退任に当たり、再度中央会長表彰並びに熊本

県連より感謝状贈呈

（熊本県 高瀬 潤吉）

シベリア抑留の思い出

熊本県 西崎 通

昭和十八年六月三日、熊本西部十六部隊に召集され、

同月、満州第十八部隊に転属。さらに同年、第十九野

戦自動車廠の特種、技術部隊要員として訓練中、熊本

出身の当時の中隊長が私ども召集兵に対して、「戦争は長期間要する。君たちは年は多いが、しばらく除隊することはない、国家のためと思ひ下士官希望を」と勧められた。

ハルビンの教育隊にて訓練中、「ソ連が満州国に侵入」の情報により当部隊は危急存亡、戦車隊編成、ハルビン市民の警戒体制をとった。一部ソ連兵と交戦状態になり、また満州の地方部隊から狙撃された。我が戦友数人が犠牲になった。その中には同期生も見受けられた。大隊長より営庭に集合との命令により、下士官、将校数百人、暗黙状態でたがずんでいた。

大隊長より天皇陛下の放送のことを言われ、我が日本帝国は降伏した、武装解除だということであらう。ぜんとしていた。ただいまよりソ連軍の指揮下に入るとの命令と同時に、ソ連将兵は、我々の時計及び携帯品をすべて取り上げた。運よく時計だけは渡すことなく無事持ちこたえた。これから牡丹江經由、ウラジオストックから内地帰還と、部隊長の話を信じて反対する人はなく、無蓋車に乗り途中で下車した。山道を行